

関西大学博物館所蔵山本竟山印章コレクションについて

施 燕

はじめに

山本竟山（一八六三～一九三四）は明治、大正、昭和前期にわたって活躍した書家であり、天皇家への上書代筆や名跡碑石の揮毫をしばしば依頼され、多くの子弟を指導した。金石法帖や書画などの造詣が深く、蒐集品も多く残っている^①。

関西大学博物館は二〇一八年に山本家から竟山の書、絵画、手紙などの資料を数多く寄贈いただいた。そのコレクションの中に、竟山が所有していた雅印二七五顆も含まれている。本稿では関西大学博物館蔵竟山印章コレクションを紹介し、日中近代の文人、文化交流に大きな業績を上げた山本竟山の足跡を辿りながら、竟山印章コレクションの特質を明らかにする。

一、山本竟山印章コレクションについて

竟山の略歴を記すと、竟山は、一八六三年に岐阜市松屋町の紙商山本卯兵衛の長男として生まれ、幼名を卯三郎、のちに卯兵衛をなのり、字

が由定といい、繇定とも書く。号は岐山のち竟山と改め、別号に聾鳳、鳳鳴、金華山民などがあり、斎号を餘清斎という^②。

初めは神谷簡齋から書を習ったが、一八八八年に明治三筆の一人である日下部鳴鶴（一八三八～一九二二）の門に入った。その後、鳴鶴の師楊守敬（一八三九～一九一五）のことを聞き、一九〇二年に中国に渡り、楊守敬を訪ねた。生涯にわたって七回（一九〇二、一九〇三、一九〇六、一九一〇、一九一二、一九二二、一九三〇）の中国遊学を果し、呉昌碩、羅振玉らと交わって金石学、古碑法帖を研鑽した。一九〇四から一九一二年までの八年間は台湾総督府の文化顧問を務め、台湾書道の発展に大いに貢献した。一九一二年に京都へ移住してから、活動は京都、大阪を中心に広がり、関西の書道界に大きな功績を残した。書壇において泰東書道院、日本美術協会、東方書道会、関西書道会などの顧問・審査長（員）を務め、書道グループ平安同好会の発足や蘭亭会をはじめとした書の展覧会を主催・協力したなどの業績が語られている^③。

さて、関西大学博物館所蔵の竟山印章コレクションは二七五顆あり、印鈕には神獸、動物、山水、花鳥などの題材が彫刻されており、素材は石、木、竹根、陶器、鉄、銅、象牙、水晶など多様である。

印面は両面印、多面印、子母印などを合わせて数えると、三〇〇面にのぼる。その中身は、姓名印、雅号印、堂号印、藏書印、吉語印、詩句印、干支印など様々がある。そのうち、竟山の姓名、字、号を刻したものが最も多い。姓名、字を刻したのでは、「山本卯兵衛」、「山本由定」、「山本繇定」、「山本繇」、「臣由定」、「繇定」、「繇」などのほか、「山本由定長寿」、「繇定長寿」、「山本由定無恙」、「山本繇定印信」もそれぞれ複数あり、揮毫した書作品の大きさ、書風に合わせて使い分けるためであろう。また、号を刻したのでは、「竟山」、「鳳鳴」、「鳳鳴岐山」、「金華山民」、「山叟」、「七十老人」、「張子虎」などがあり、いずれも書作品の使用例が確認できる。ほかに、「竟山翰墨」、「癸丑竟山」、「竟山丁巳文字」など組み合わされたものも少なくない。成語・詩句印では、「澹兮若海」、「曲則全枉則直」、「勇于不敢」、「知足不辱」、「寵為下」、「安平大」など『道德經』を典拠としたものが最も多い。そのほか、「十藏五出」、「受天百禄」、「以介眉寿」、「江流有聲斷岸千尺」、「渺渺兮予懷」、「足吾所好翫而老焉」、「清風來故人」、「覺今是而昨非」、「會心不遠」などの詞句印もあり、いずれも中国の古典作品を依拠したものである。また、刻者は中国の篆刻家では徐星州、呉隱、趙時桐、金鉄芝、王大炘、張瑞芝、日本の篆刻家では、足達疇邨、円山大迂、浜村蔵六（五世）、園田湖城、木村翠蔭、奥村竹亭、阪井呉城などの錚々たるメンバーがいる。そのほか、無落款の刻者によるものも多数ある。そして、無落款のものの中には鄧石如、趙之謙、呉昌碩などの名家の篆刻を模して刻したもの、いわゆる模刻印も数少なく含まれている。以下、竟山の愛用印、愛蔵印を一部紹介する。【一】内の数字は竟山印章コレクションの収蔵番号による。

側款にある句読点は筆者による。各印章の寸法、鈕形等詳細は文末の「関西大学博物館蔵竟山印章コレクション一覧表」が参照されたい。）

（一）愛用印

【五〇、四九】

園田湖城刻対印「繇定」、「竟山」、一九一七年

「繇定」は側面に「丁巳四月穆」とあり、「竟山」は「清卿」となる。一九一七年に園田湖城が刻したものである。《春雷発声出自地長日獨坐全吾天》（条幅、個人蔵）、《臨餘清齋本樂毅論》（折帖、個人蔵）、《集漢西狭頌碑字》（条幅、個人蔵）に捺印されている。

【七二、五】

徐星州刻対印「山本繇印」、「竟山」、一九二二年

「山本繇印」は側款に「竟山先生有京漢之行道出海上、睽隔十年豊神猶昔、相見歔然、為刻此印、以留鴻爪云。辛酉春呉門徐星周記。」、「竟山」は「七十老人星州作于滬上」との刻字から、一九二一年に竟山が六回目の中国遊学の時に徐星州（一八五三～一九二五）が刻したものである。《楷書扁額（從善如流）》（個人蔵）、《行書扁額（于胥樂）》（個人蔵）、《篆書一行（大吉羊）》（個人蔵）、《草書七言律（山園小梅）》（関西大学博物館蔵）などの作品に二顆揃えて鈐印されている。《臨張金界奴本蘭亭序》（一九三三、個人蔵）には「竟山」が使用されている。

【二二六、二四〇】

金鉄芝刻対印「繇定長寿」、「竟山翰墨」、一九二三年

「繇定長寿」は側面に「漢鑄印中最精者為竟山先生法家製 鍊芝記」と

刻まれ、「竟山翰墨」は「封泥渾石中含秀勁意味有不可思議之妙 非工力深邃未易撫擬也 時癸亥冬至節 鍊芝記」との側款があり、一九二三年に金鉄芝がそれぞれ漢印風と封泥風に作ったものである。「絳定長寿」は、竟山七十二歳の作品《隸書一行（萬歲）》（個人蔵）、《楷書二行（凍筆新詩懶寫寒爐美酒時温）》（個人蔵）、《尹氏簠銘》（一九三二年）、《行書對幅（韭花春拓帖蕉葉夜鐫銘）》（個人蔵）に使用されている。《隸書一行（弘榮）》（関西大学博物館蔵）では二顆揃えて鈴印されている。金鉄芝（一八九三—一九七三）は、呉昌碩晩年の高弟の一人である。

【九〇、八九】

趙時桐刻対印「山本絳定長寿」、「鳳鳴岐山」、一九二三年

精緻に彫刻された子母神獸鈕の対印である。「山本絳定長寿」は側面に「趙叔孺仿漢 竟山先生周甲榮壽 時癸亥秋七月」とあり、「鳳鳴岐山」は「擬列國鉞 叔孺作于二弩精舍」と刻まれているから、一九二三年の秋、竟山の還暦を祝うために、趙時桐がそれぞれ古璽風と漢印風に作って贈ったものであることが分かる。《臨晉王黃門郎卷》（一九三二、個人蔵）に二顆揃えて鈴印されている。刻者の趙時桐は清末民初の篆刻家、書家、画家であり、名を時桐、字を紉長、号は叔孺で晩年は二弩老人と称した。

【三三】 足達疇邨刻「竟山翰墨」

側款に「疇邨作」と記されており、制作年は不詳である。《隸書一行（心静即身凉）》（個人蔵）、《楷書二行（至人之心如珠在淵常人之心如瓢在水）》（一九三三、個人蔵）、《臨宴敦銘》（個人蔵）、《隸書二行（常將堅節栖孤鶴不遣高枝宿衆人）》（関西大学博物館蔵）などの作品に使用されている。

【二七】 王个簠刻「絳定長寿」、一九三〇年

側款に「竟山先生法家正刻 庚午五月朔日 个簠王賢」とあり、一九三〇年竟山が七回目の中国遊学の時に入手したのであろう。前述した足達疇邨刻「竟山翰墨」印と合わせて使うことが多い。《臨宴敦銘》（個人蔵）、《隸書二行（常將堅節栖孤鶴不遣高枝宿衆人）》（関西大学博物館蔵）での使用が確認できる。王个簠（一八九六—一九八九）は、名を賢、字は啓之といい、个簠は号である。幼くして詩文、金石、書画を好み、二十七歳の時、呉昌碩に師事し、昌碩晩年の高弟となった。

【二二】 円山大迂刻両面印「竟山画記」「竟山」、一八八八年

「竟山画記」の側款として「戊子榴花月於東武李步齋大迂生」が刻まれている。一八八八年に円山大迂が刻したものであるが、両面とも趙之謙が一八五七年に何澂のための刻印を模したものである。何澂は清朝後期の書家、画家で、字は鏡山といい、竟山ともいう。竟山は趙之謙の印に頗る興味があるようで、ほかに同じく趙之謙が何澂のために刻した【一五】「竟山拓金石印」、【二四】「竟山五十歳後作」、【四二】「竟山七十歳後作」の模刻印を愛蔵・愛用している。興味深いことに、竟山はこの印の「竟山」の面を雅号印としてではなく、遊印として使っている。《函皇父匱銘》（個人蔵）はその例である。一方、制作年代から、大迂はもともこの印を竟山のために刻んだかどうかは不詳であるが、竟山印章コレクションに大迂が刻した印はほかに【五九】「金華山民」（側款…「戊子暮春之吉于東武李步齋皆桜花已謝牡丹將開大迂陳人勒石」）など大迂の款識のあるものが三顆あり、竟山と大迂はなんらかのつながりがあったのであろう。

【九四】「曲則全枉則直」

「曲なればすなわち全し、枉がれば即ち直し」という老子の哲学を語る言葉で、『隸書対幅（置身秦漢以上所居廉讓之間）』（個人蔵）、『楷書五律（纔過袁柳渡又上折蘆灘談咲数十里不知行路難）』（個人蔵）、『竟山画石』（関西大学博物館蔵）に鈐印が確認される。印の側面に「歳在甲寅 大正三年暮春 曲則全枉則直 竟山先生出此語 使我刻之 古越□□并作」との款識があるが、陶製印のため、焼成時のひび割れにより欠字の部分は判読しにくい状態となっている。

【二四八】「強其骨」

老子の「弱其志強其骨」（人々の欲望を弱くして、その肉体を強くする）から取った言葉を刻んだもので、引首印として好んで使われた。『函皇父匱銘』（個人蔵）、『行書対幅（韭花春拓帖蕉葉夜鐫銘）』（個人蔵）で確認できる。引首印としてはほかに、『六九』「時還読我書」、『一一六』「曲鑒」、『一六九』「江流有聲斷岸千尺」、『二五六』「長樂未央」、なども愛用された。

(2) 愛蔵印

【三】「宝董室」（模刻印）

「宝董室」というのはつまり中国清朝後期の文人、蒐集家沈樹鏞（一八三三～一八七三）の堂号である。沈樹鏞は金石を好み、書画、碑帖の蒐集品が豊富で清代後期において最も影響力のある蒐集家の一人である。楊守敬が日下部鳴鶴との筆談（一八八八）の中で、当時中国の好古家を触れて、碑帖に最も優れたものを収蔵しているのは沈樹鏞だと言及して

いる。一方、沈樹鏞は書家、画家、篆刻家の趙之謙（一八二九～一八八四）と親しく、趙之謙は沈樹鏞の使用印を多数刻した。その中の一つは「宝董室」である。竟山印章コレクションの「宝董室」は趙之謙が刻したものの印文、大きさ、印風だけでなく、印面の欠けた部分まで意識的に模している。竟山が第四回（一九一〇年）の中国遊学の際に入手した書幅、拓本、法帖、扇面、書籍などの品々を自ら列記した『庚戌所獲品目』では『董其昌臨晋唐宋名賢四十四頁大帳神品』の項目の下に「我家第一墨宝得此帖自称宝董室」との注記がなされており、董其昌の書を手した竟山の心情と碑帖蒐集の名家沈樹鏞に対する敬慕の心がうかがえる。また、趙之謙は篆刻の名手だけでなく、清代後期に流行した碑学派の中心人物でもあり、竟山が中国に行くたびにその作品を集めていた。古碑法帖の蒐集と研鑽に熱心な竟山にとって沈樹鏞と趙之謙にまつわるこの「宝董室」印は自身を励ます一顧であるに違いない。なお、竟山印章コレクションには同じく趙之謙が刻した『一一六』「鄭斎」（沈樹鏞の号）を模刻したものも所蔵している。

【二一八】「蘭亭」、【八八】「孺初」

「蘭亭」印は「大正癸丑石禪作」との款識がある。本来は鉄製の印であるが、錆びがついて、火に焼かれた痕跡がある。一九一三年（大正癸丑）に京都で開催された「蘭亭会」の記念品として作られた木製の丸盆¹²についている「蘭亭」の焼印はつまりこの「蘭亭」印による。犬養毅、内藤湖南などが会場で王羲之の『蘭亭序』の句を丸盆に書きしたものが残されている。作者の石禪は管見の限り不詳であるが、石禪の款記のある印章は竟山印章コレクションにはかにも数顆あり、竟山の信頼を得てい

る篆刻家で間違いないだろう。竟山は京都「蘭亭会」の首唱人の一人として、展示品の調達や自身の所蔵品の出品、自ら『蘭亭序』を臨書するなど、その準備に奔走した。この「蘭亭」印も「蘭亭会」のために注文したものであろう。

また、同じく竟山の功績にまつわる印として、「孺初」印が挙げられる。竟山が師の楊守敬から譲った《潘存臨鄭文公下碑》をもとに刊行された『博文堂影印潘孺初先生臨鄭文公碑』（一九一四年）では、「孺初」（潘存の号）の朱印が一部ずつ原鈐されている。杉村邦彦氏によれば、この印は当時刊行に当って誰かに作らせたという。^⑩ 関西大学博物館蔵竟山コレクションに「竟山珍藏潘孺初先生印蛻」（手紙類一八）という竟山の自筆による封筒があり、「孺初」を実押印されたものが入っている。すなわち、この「孺初」印は竟山が所有していた潘存所有の「孺初」印の印影をもとに作った可能性が極めて高い。

右記の二顆は竟山の自用印ではないが、歴史に残る雅会の開催に協力し、日本近代の書道に大きく影響を与えた碑帖を将来し普及させたなど、日中の書道交流における竟山の功績を物語る二顆である。

二、山本竟山と日中篆刻家の交流

第一章の冒頭で触れたように、竟山印章コレクションには日中の著名な篆刻家によるものが多数ある。実際、それらの印章を刻んだ篆刻家の中に、竟山と交流の深い人も少なくない。例えば、呉昌碩が竟山と最も親交のある一人として挙げられよう。

呉昌碩（一八四四～一九二七）は中国近代の書、画、篆刻の巨匠で、西泠印社^⑪の初代社長を務め、金石資料を収集するなど大きな業績を世に残した。門下には齊白石や徐星州などの大家が輩出した。河井荃廬^⑫や浜村藏六（五世）など近代日本の篆刻家もその刻印に傾倒し、中国に渡り呉昌碩に師事した。また、呉昌碩は中国の文人だけでなく、日下部鳴鶴や長尾雨山をはじめとする日本の文人、学者とも広く交友し、近代日中の文化交流を語るに欠かせない人物の一人である。

杉村邦彦氏と蘇浩氏によれば、竟山は一九〇三年に第二回の中国遊学を果たした際、日下部鳴鶴の紹介で呉昌碩と交流を始めたという。^⑬ 竟山印章コレクションに確認された呉昌碩の刻印は一顆のみであるが、実際の交友の中で、呉昌碩は竟山の銀婚式を祝うために絵を描いたり、竟山の両親の墓碣題字^⑭を揮毫したりするなど、両氏はかなり親交していたようである。また、呉昌碩を中心とする印学のネットワークに徐星州、呉隠、王大炘^⑮、張瑞芝、金鉄芝、葉銘、王介禔らの篆刻家があり、竟山はこれらの篆刻家とも印を通して交流を行っていた。中では特に徐星州と呉隠が竟山の自用印を多く刻した。以下、印章の側款を取り上げながら、竟山と徐星州、呉隠との交流状況を考察する。

徐星州（一八五三～一九二五）は、字は星舟、別に星州、星洲、星周と署したが、そのうち星州を最も常用した。江蘇呉県の人である。呉昌碩の印に敬慕し、師弟の礼をとった。呉昌碩晩年の代刻者としても知られているが、刻印は師の法則を厳守しながらも、自らの風韻を備えている。^⑯ 徐星州による竟山の印章は制作年が不詳なものを含めて、十六顆ある。

徐星州刻竟山印章

一九〇二年

【一〇五】「山本由定」、側款：「竟山先生、東京博雅士也。廣徵金石

以論華才風調、不勝欽佩。係賜美濃佳紙罕見之宝、愛蔵之。別無感酬爰刻石印一方、聊以奉贈不免貽笑耳。光緒壬寅四月古吳徐星州。時同客滬上而。」

【六〇】「山本由定」、側款：「壬寅四月星州做泥封」

【七五】「鳳鳴岐山」、側款：「此印撫漢磚為竟山先生教正 壬寅四月星舟」

【四二】「竟山所得金石」、側款：「壬寅夏星州刻」

一九〇三年

【二二】「餘清齋」、側款：「癸卯二月撫吳讓之法 即請竟山先生教

正 古吳星舟」

【二五】「繇定」、側款：「癸卯仲春 為竟山先生作 星舟」

【二〇四】「鳳鳴」、側款：「光緒癸卯三月為竟山先生仿漢 即請教我 徐星州記」

【七八】「山本繇定印信」、側款：「光緒癸卯夏四月 撫漢將軍印 以贈竟山先生 徐星舟」

一九一〇年

【二三二】「鳳鳴所見金石」^⑧、側款：「草率奏刀、頗得吳讓之意味。古人云欲速則不達、余適以從速得之、亦出於偶然也。今為

老友鳳鳴先生之属并請指謬。庚戌夏古吳徐星舟記于滬江。」

一九二一年

【七二】「山本繇印」、側款：「竟山先生有京漢之行、道出海上、睽

隔十年豐神猶昔、相見歛然、為刻此印以留鴻爪云。辛酉春吳門徐星周記。」

【五】「竟山」、側款：「七十老人星州作于滬上」

【八四】「竟山審定」、側款：「辛酉三月為竟山老友作此古吳徐星州」

年代不詳

【二】「鳳鳴心画」、側款：「星州刻贈竟山先生」

【四六】「山本繇定長寿」、側款：「星州做漢于滬」

【二六八】「岍由定」、側款：「新周」

【二一四】「由定鳳鳴」、側款：「新周刻」

【一〇五】はおそらく竟山と徐星州が最初に会った時に刻されたのであろう。その側款から当時の状況が読み取れる。つまり、竟山は日本の美濃紙を持って徐星州に訪ねたところ、徐星州は大いに喜んで、その返しに竟山の姓名印を刻したのである。それ以降、竟山は一九〇三、一九一〇年、一九二一年の中国遊学時も徐星州に訪ねて、親交を続けていた。そして、竟山が一九二一年に中国にわたった時の日記（四月二四日）

では「徐星舟、唐熊卜兩人ニテ来訪。印十五方、五十一字刻ヲ託ス。一周後刻成。」との記述があり、印十五顆を星州に頼むと書いているが、おそらく竟山は自用印だけでなく、知人からの刻印の依頼も徐星州にしたのであろう。

一方、竟山が始めて中国にわたった時（一九〇二年）から徐星州と交流が始まっていることが興味深い。つまり竟山と徐星州との交流は、呉昌碩との交流よりも一年早い。すなわち、徐星州は呉昌碩の一番弟子であるが、徐星州に竟山を紹介したのは、竟山と親交のある呉昌碩ではない。おそらく、竟山の師で、同時に呉昌碩と徐星州の共通の友人楊守敬であろう。いずれにしても、竟山は一回目の中国遊学で武昌に楊守敬を訪ねただけでなく、金石を通して徐星州をはじめとする様々な文人、学者と広く交友関係を結んだだろう。

続いて竟山と呉隠の交流状況を取り上げる。呉隠（一八六七～一九二二）は、本名を金培といい、字を石潜、号は潜泉、別に遜齋と署した。浙江紹興の人である。幼い時家が貧しく、郷里を出て杭州へ行き、碑版の彫刻を習って生計を立てていた。仕事の余暇に、広く金石の墨本を読み、葉銘²⁴の教えを受けながら、学問、技芸ともに上達させた。一九〇四年、丁仁、王褱、葉銘らと西泠印社を創設した²⁵。呉隠による印は複数の側款のものも含まれているが、ここでは単款のもののみ取り上げる。

呉隠刻竟山印章

一九〇二年

【二〇】「繇定長寿」、背款：「光緒二八年七月朔日 為竟山先生作

石潜呉隠

一九〇三年

【二四七】「竟山」、側款：「光緒廿九年二月六日 山陰石潜呉隠刻于

竟山先生文房 得漢□銅印□」

一九〇六年

【五一】「山本由定」、側款：「光緒卅二年冬月 為竟山先生仿搨叔

法 石潜呉隠作」

【二五】「鳳鳴」、側款：「石潜刻于海上」

側款に記された印章の制作年から、竟山と呉隠の交流は徐星州と同じく竟山が最初に中国に渡った時から始まっている。竟山印章コレクションには一九〇二、一九〇三、一九〇六年の印章のみ残っているが、実際一九二一年に中国に渡った時の日記にも竟山が呉隠を訪ねたことを記録している。その日記によれば、竟山は四月一日に神戸港から出発して四月一九日に上海の呉淞港に到着した。到着したその翌日（四月二〇日）に呉隠を訪ねた。詳細は記されていないが、五月二五日に再び呉隠宅を訪問し、六月一日では「呉石潜ヨリ端研贈来」との記述があり、竟山が上海滞在中は呉隠と数回面会した。一九二二年呉隠が没するまで、二人の交流は続いていたのであろう。また、関西大学博物館所蔵の竟山コレクションに呉隠の名刺²⁶が三枚あり、いずれも呉隠から竟山宛の手紙替わりに使われていた。そのうちの一枚では、「見字即速遇我一観印色」と書

かれている。「印色」というのは印泥のことである。呉隱は刻印に巧みだけでなく、印泥作りも得意であるが、ここはおそらく印泥の移り具合、つまり、印面の出来具合を竟山と一緒に見たいということであろう。そして、年記が一九〇三年とわかる一枚では、「今日如得暇請過敝館訪東瀛日下先生碑」と書かれており、二人の交遊に日下部鳴鶴も加わっていることがわかる。

一方、側款から判明した日本の篆刻家に円山大迂、浜村蔵六（五世）、園田湖城、足達疇邨、木村翠蔭、奥村竹亭、阪井呉城がいるが、ここでは、印章の数が最も多い園田湖城と浜村蔵六（五世）を取り上げることにする。

園田湖城（一八八六―一九六六）は、本名は耕作、字は清卿、号は湖城、平齋といい、滋賀県の人である。中国の古印を収集し、『平齋蔵古印譜』、『穆如清風室考蔵古漢印』を刊行するほか、平安印会、同風印社を主宰し、同風印社の機関誌『印印』を刊行するなど、日本の篆刻界を牽引した一人である。園田湖城が刻した印は年代不詳のものを含めて、七顆ある。

園田湖城刻竟山印章

一九一三年

【二一八】「臨蘭亭廿六幅之一」、側款：「癸丑四月湖城作」

【二一九】「集蘭亭字廿六對之一」、側款：「竟山先生博粲湖城畔刊

癸丑四月」

一九一七年

【四九】「竟山」、側款：「清卿」

【五〇】「絳定」、側款：「丁巳四月穆」

年代不詳

【三五】「鳳鳴」、側款：「湖城刻贈竟山先生」

【四七】「絳定」、側款：「畊作」

【六四】「鳳鳴」、「湖城刻」

湖城と竟山は、実際はいつから交流が始まったかは不詳であるが、湖城が刻んだ印章からみれば、一九一三年の二顆が最早のものとなる。それらは、印文の内容からみると、おそらく大正癸丑の「蘭亭会」のために、「蘭亭序」の臨書に用いる印章であろう。竟山の年譜によれば、竟山は同じく一九一三年に毎週一回同好の士と書学を中心に研究することを目的とした金曜会を発足した。これは後に拡大し、平安書道会^⑧となるが、当時では、竟山が中国から持ち帰った碑法帖などを見て交流を行い、その参加者に湖城もいたという。「蘭亭会」を接点に二人は交流を深めたと推測される。また、湖城が一九一四年に自身が刻した印を竟山の教示を求めするために送った手紙^⑨が残っている。手紙は、漢の肖形印風の「張子虎」朱文印の横に、「竟山先生法家笑正甲寅暮春湖城作」と書かれている。竟山印章コレクションに湖城が刻したその「張子虎」印の原石は確認されていないが、竟山が落款として「張子虎」を好んで使っていた^⑩ためか、コレクションには作者不詳のものを含めて三顆ある。

続いて、五世浜村蔵六（一八六六―一九〇九）は、名は裕、字を有孚、または無咎、立平と称し、彫虫窟主人と号した。四世蔵六について家学を学び、明治二十七年に五世蔵六の名を襲名した。秦漢の古印、金文、瓦当を学び、呉昌碩に心酔し、河井荃廬にしたがって中国に遊び、呉昌碩、徐星州をはじめ、多くの文人と交わった。印譜に『旅窗戲鐵』、『彫虫窟印藪』、『蔵六居士結金石縁』、『蔵六金印』などが刊行された。

浜村蔵六（五世）刻竟山印章

一九〇二年

【二三】「山本由定」、側款：「蔵六袞製于滬上客舎、時光緒二十八年四月望日。」

一九〇八年

【三二】「間中一楽」、側款：「残夜日昇東海春、仰瞻岳雪白如銀、紫宸殿上祥雲起、十二門前柳色新。戊申元朝試刀袞 竟山先生正。」

【二三五】「由定戊申文字」、側款：「袞作」

年代不詳

【六六】「鳳鳴山本絳定」、側款：「袞為鳳鳴先生製」

制作年が最も早い【二三】の側款からみると、竟山と蔵六との交流は一九〇二年二人とも中国滞在中の時から始まったようである。また、同

時期に蔵六が中国滞在中に交遊した知名人士の刻印を集成したものを印譜集『蔵六居士結金石縁』（明治三五年跋）として刊行したが、竟山は「蔵六居士結金石縁 竟山山本由定題」との題簽を書いた。^⑧ 竟山印章コレクションに刻者と制作年とも不詳な「竟山」印（二四四）があるが、その側款に「結金石縁之一 竟山先生鑑正」と刻まれており、おそらく『蔵六居士結金石縁』に関係する一顆であろう。

さらに、一九〇八年の刻印に注目してみると、つまり、竟山は一九〇四年から台湾総督の秘書官として招聘され、一九一二年まで台北に移住していたが、その間も頻繁に蔵六と連絡を取っていたということであろう。竟山が知人のために蔵六に刻印を依頼する旨の書簡が残っているが、「当地本年者殊ニ不順ベスト病流行ニハ閉口仕候時□本順ニ復シ惡疫も撲滅いたし候得共熱ニハ又閉口幸ニ無異乍他事御求心被下候先日より知人より先生ニ法刻ヲ求たし依頼受居候ニ付其間印材差出可申候間宜布御願申上置候先者暑中御見舞旁得貴意勿々蔵六先生文安 八月十五日 岬由定頓首（山本由定 白文印）」（一部釈文。）と書かれている。封筒がないため、書写年は不明であるが、文面に「当地」という表現と「八月十五日」という日付に、竟山が八月に中国大陆に渡ったことがないことを加え、書写されたのは竟山が台湾駐在中の時期だという可能性が示される。そのためなのか、【三二】は日本から離れている竟山のために、古都の風景を詠んだ詩を刻み贈ったのだらう。

いずれにしても、竟山は徐星州、呉隱、園田湖城、浜村蔵六（五世）らの日中の篆刻家と親しく交流を行ったことが明らかであろう。

おわりに

以上、竟山印章コレクションについて略述した。書作品の落款印、書学の形成にまつわる印、歴史に残る功績を物語る印、親交の証としての印などが含まれるこのコレクションは、山本竟山という書家の半生を端的に語るコレクションだといっても過言ではない。

同時に、竟山印章コレクションに収められる印章は、印材、印姿ともに優れたもので、呉昌碩、徐星州、呉隱、趙時桐、金鉄芝、王大炘、張瑞芝、円山大迂、園田湖城、浜村蔵六（五世）、足達疇邨、木村翠蔭、奥村竹亭、阪井呉城らの刻者、つまり、近代の中国と日本を代表する篆刻家の刻印を集成する貴重な作品群でもある。その形成は、書をはじめ、碑帖、篆刻などの学問、芸術を以て広く交友し、日本と中国の文人世界を縦横する山本竟山だからこそできたものに違いない。

注

- ① 山本竟山の蒐集品、旧藏品について、蘇浩「山本竟山とその書学の影響」・関西大学竟山コレクションをもとに、『東アジア文化交渉研究』、二〇二〇年、三九九～四一三頁が詳しい。
- ② 「山本竟山年譜」山本竟山先生五十回忌追悼会運営実行委員会編『山本竟山先生五十回忌追悼記念展図録・作品集』・日本近代書道の先覚者』、泰山書道院、一九八三年、九八頁。
- ③ 寧楽書道会発行「山本竟山先生略歴」『書鑑』第十卷第三号、一九三四年。
- ④ ほかの二顆は改刻印。「山本由定」、六、側款：「石潜／丙申試刀長耳詞宗仁兄正有年改刻／己丑夔六月拭汗□□大迂陳人」。「竟山」、八一、側款：「石潜／大迂仿古於東武孝步齋奏刀」。
- ⑤ 《草書七言律（山園小梅）》（関西大学博物館蔵）
- ⑥ 《隸書一行（心靜即身涼）》（個人蔵）、《行書二行（幽人來問籬邊菊僊客相論海上琴）》（個人蔵）
- ⑦ 《臨裴將軍詩》（一九三三年、個人蔵）
- ⑧ 《臨晉王黃門郎卷》（一九三三年、個人蔵）
- ⑨ 桑樞「沈樹鏞与晚清印人交遊考略——以碑帖鑒藏印為中心」、『榮宝齋』、二〇一六、一一。
- ⑩ 「庚戌所獲品目」、一冊、個人蔵、『山本竟山の書と学問 湖南・南山・鉄斎・南岳の文人交流ネットワーク』図録四七、二〇一八年。
- ⑪ 山本竟山六回目的中国遊学時の日記について、杉村邦彦編「山本竟山遊支日記——自大正十年四月十日至同年七月十五日——」、『書道文化』・四国大学書道文化学会誌』一一、二〇一五年、一〇一～一一六頁が詳しい。
- ⑫ 二・五×二七・六cm、「蘭亭」のほか、「癸丑」の焼印もついている。関西大学大正癸丑蘭亭会百周年記念行事実行委員会『大正癸丑蘭亭会百周年記念』図録一〇九、一一〇、二〇一三年。『山本竟山の書と学問 湖南・南山・鉄斎・南岳の文人交流ネットワーク』図録一〇五、二〇一八年。
- ⑬ 楊守敬から譲った経緯、刊行時の事情について、杉村邦彦「潘存臨鄭文公下碑の伝来とその歴史的意義」『書学書道史研究』、一九九三年。

(三二)、二二―三六頁が詳しい。

⑭ 西泠印社は、中国浙江省の杭州市にあり、清代末期の光緒三〇（一九〇四）年、丁仁、王禔、葉銘、吳隱らが、篆刻振興と伝統継承を目的に創設した、金石学および印学について研究を行っていた学術団体である。一九一三年吳昌碩が初代社長として推挙された、当時の社員には江南を中心とする各地の篆刻家、収集家、学者などが含まれていた。また、日本人社員に河井荃廬（一八七一―一九四五）、竟山と親交のある長尾雨山（一八六四―一九四二）がいた。

⑮ 一九〇〇年（明治三三）に河井荃廬が吳昌碩に入門し、以降はほぼ毎年吳昌碩を訪問したという。松村茂樹「日本文化界吳昌碩関連年表」、『人間生活文化研究』二六、二〇一六年、二〇二―二〇五頁。なお、松村茂樹氏の研究によれば、吳昌碩が九〇名以上の日本人と交流したことがあるという。

⑯ 竟山と吳昌碩の交友状況については、（一）蘇浩「山本竟山と吳昌碩の文人交流」、『東アジア文化交渉研究』（二二）、二〇一九、三六一―三七六。（二）杉村邦彦「陳年画楊守敬吳昌碩題賛日下部鳴鶴肖像考」『墨林談叢』、柳原書店、一九九八年、一二三―一三七頁。（三）大橋成行、大野修作、近藤茂「篆刻書画逸事インタビュー山本竟山とその周辺」『書法漢學研究』二二、二〇〇八年、七一―七六頁が詳しい。

⑰ 竟山印章一七一、印文「養泉經眼」、側款「養泉先生法家吳俊又榘」

⑱ 吳昌碩が書した墓碣題字の原本「釋淨嶽信士教里尼墓壬子冬仲吳昌碩」は関西大学博物館に所蔵されている。

⑲ 王大圻（一八六九―一九二四）字は冠山、水鉄と号した。江蘇吳県の人である。二十余歳の頃、居を上海に移した。医術に精しく、医者をやめた。金石の学を癖好し、金石に関する著作が多い。

⑳ 小林斗盦編『中国篆刻叢刊』第三八卷 近代2、一九八四年。

㉑ この印章は『庚戌所獲品目』（一九一〇）に記録がある。

㉒ 葉銘（一八六七―一九四八）、本名は為銘、葉舟と号した。幼くして篆隸を善くし、十余歳ですでに鉄筆を巧みにした。刻碑および彝器の款識の模拓や金石考挾などの造詣が深い。西泠印社の創設メンバーの一人である。

㉓ 小林斗盦編『中国篆刻叢刊』第三八卷 近代2、一九八四年。

㉔ 関西大学博物館蔵竟山コレクション（手紙類一五）。

㉕ 「二月二五日」と書かれている。竟山が二月頃に中国に渡ったのは一九〇三年のみである。

㉖ 平安書道会ホームページに載っている平安書道会史によれば、同会は大正二年に「平安同好会」として発足され、園田湖城などの文人、書家が相次ぎ参加してきた。大正九年に名称を「平安書道会」と改め、学識と技術両面の研鑽を目的として活動し、新進書家の登竜門ともなっている盛況を呈した。公募展や交流展を開催するなど、近現代日本の書道発展に大きく寄与してきた。

㉗ 関西大学博物館蔵山本竟山コレクション（手紙類一七）。

㉘ 「雲煙養寿」「筆歌墨舞」（画帖、一九一六年、個人蔵）

㉙ 太田孝太郎「五世浜村蔵六」『書品』（二四九）、一九六四年、六一―六三頁。高畑常信編『日本の遊印』、木耳社、一九八三年。

③⑩ 高山節也『松丸東魚菟集印譜解題』、二玄社、二〇〇九年、三五三頁。

③⑪ 早稲田大学図書館蔵「山本由定書簡…浜村蔵六宛」、『市島春城菟集名家書簡集』。

附表 関西大学博物館蔵山本竟山印章コレクション一覧表

NO.	印文	印影	形状	印材	鈕形／薄意	寸法 (cm)		御款	刻者／作者	年代
1	鐘華	白文	方印	石		4.6×4.6×6.4	なし		不詳	不詳
2	鳳鳴心画	朱文	方印	石		4.3×3.4×4.4	星州刻贈竟山先生		徐星州	不詳
3	宝董室	朱文	方印	石	神獸	3.7×3.7×5.8	なし		不詳	不詳
4	酒生	朱文	方印	石	山水楼阁	3.0×3.0×6.3	なし		不詳	不詳
5	竟山	朱文	方印	石		2.9×2.9×6.7	七十老人星州作于廬上		徐星州	1921
6	山本由定	朱文	方印	石	神獸	2.9×2.9×8.6	数款：石譜／丙申試刀長耳詞宗仁兄正有改刻／己丑變六月拭汗□□大辻陳人		不詳	不詳
7	富貴不見尋常人	朱文	長方印	石	神獸	3.4×2.2×7.0	なし		不詳	不詳
8	鳳苑	朱文	方印	石		2.4×2.4×4.0	前		不詳	不詳
9	竟山別号鳳鳴	朱文	方印	木		3.0×3.0×3.2	なし		不詳	不詳
10	身居城市意在山林	朱文	方印	石		3.2×3.2×4.2	なし		不詳	不詳
11	謙兮若海	白文	方印	石	麒麟	5.3×2.3×6.0	戊午一月吉 對石作		不詳	1918
12	竟山	朱文	方印	石		2.3×2.3×5.4	なし		不詳	不詳
13	榮珠	朱文	方印	石		1.8×1.8×6.0	なし		不詳	不詳
14	山氏四分	白文	方印	竹根		3.8×3.8×3.0	なし		不詳	1913 (杓内墨書)
15	鳳鳴	朱文	方印	石		2.8×2.8×5.4	石譜刻于海上		吳聰	1906
16	□□中□禮	朱文	方印	石		4.4×4.6×7.0	生鐵作		不詳	不詳
17	筆歌墨舞	白文	方印	陶器	蓮葉	5.0×5.0×6.0	なし		不詳	不詳
18	臣卯兵衛之章	白文	方印	石	神獸	2.3×2.3×5.7	【 】六月【 】		不詳	不詳
19	竟山心書	朱文	方印	石	神獸	1.9×1.9×4.7	なし		不詳	不詳
20	緣定長寿	白文	方印	石		2.6×2.6×2.5	数款：(背)光緒二八年七月朔日為竟山先生作 石譜吳聰／□□		吳聰	1902
21	竟山	朱文	方印	石		1.3×1.3×2.7	なし		不詳	不詳
22	餘清斎	白文	方印	石		2.0×2.0×5.3	癸卯二月撫吳讓之法 即請竟山先生教正 古吳星舟		徐星州	1903
23	山本由定	白文	方印	石		2.5×2.5×5.3	藏六装裱于廬上客舍 時光緒二十八年四月望日		浜村藏六 (五世)	1902
24	竟山五十歳後作	白文	方印	石	神獸	1.9×1.9×5.0	なし		不詳	不詳
25	緣定	朱文	方印	石		2.0×2.0×5.3	癸卯仲春為竟山先生作 星舟		徐星州	1903
26	癸丑竟山	白文	方印	石	神獸	2.1×2.1×5.3	大正二年六月 寄山贈		不詳	1913
27	甲寅竟山	白文	方印	石	神獸	2.1×2.1×4.8	大正三年□月 為竟山仁兄作之 寄山		不詳	1914
28	由定長寿	白文	方印	石		2.1×2.1×5.3	竟山兄正家 古香子桂		不詳	不詳
29	竟山	朱文	方印	石		2.2×2.2×3.9	竹亭		奥村竹亭	不詳
30	竟山所得金石	白文	方印	石	馬	2.2×2.2×5.1	光緒癸卯花朝為竟山方家作 葉舟		葉銘	1903
31	間中一葉	朱文	長方印	石		2.0×1.5×5.3	殘夜日昇東海春 仰瞻岳雪白如銀 紫宸殿上祥雲起 十二門前柳色新 戊申元朝試刀		浜村藏六 (五世)	1908
32	斷岸千尺	白文	方印	石		3.0×2.7×3.8	斷岸千尺 西山刻		不詳	不詳
33	竟山翰墨	白文	方印	石	神獸	2.4×2.4×5.2	瞻部作		足達瞻部	1933以前
34	竟山丁巳文字	朱文	長方印	石	神獸	2.7×2.0×4.3	大正六年一月寄山贈		不詳	1917
35	鳳鳴	白文	方印	石		1.5×1.5×3.0	湖城刻贈竟山先生		圓田湖城	不詳
36	①長白山印 竟山 ②卯印 □□	朱白文相間	連珠方印	石		2.3×1.2×3.6	①為竟山雅兄石樺刀 ②為山本君鳳□六十八翁刻		不詳	不詳

NO.	印文	印影	形状	印材	鉤形／薄意	寸法 (cm)	備款	刻者／作者	年代
37	①由定 ②竟山所得素石 ③書生	白文	長方印	石		20×1.1×5.7	①石潛為竟山製 ③光緒癸卯□□竟山□ 石潛刻	吳聰	1903
38	臣由定	白文	方印	石		18×18×5.0	寬翁教迪軒	不詳	不詳
39	繇定	白文	方印	石		22×22×3.9	竹亭	興村竹亭	不詳
40	繇以自娛	白文	方印	銅	連鑲	60×60×10	丙寅清明驪歌作	足達壽郡	1926
41	繇定	白文	方印	石		20×20×3.8	なし	不詳	不詳
42	竟山所得金石	朱文	方印	石		27×27×6.3	壬寅夏星州刻	徐星州	1902
43	竟今是而非	朱文	長方印	石		36×26×2.5	なし	不詳	不詳
44	山本繇定	白文	方印	石	神獸	19×19×4.8	なし	不詳	不詳
45	繇定拜贈	白文	方印	石	松鶴	19×19×4.8	なし	不詳	不詳
46	山本繇定長壽	白文	方印	石		41×40×3.8	星州做漢子灑	徐星州	不詳
47	繇定	白文	方印	木		30×30×7.0	聊作	園田湖城	1925年以前
48	竟山	朱文	方印	木		28×28×6.2	なし	不詳	不詳
49	竟山	朱文	方印	石		25×25×3.0	清卿	園田湖城	1917
50	繇定	白文	方印	石		25×25×3.0	丁巳四月穆	園田湖城	1917
51	山本由定	白文	方印	石		28×28×5.3	光緒卅二年冬月 為竟山先生仿揭叔法 石潛吳聰作	吳聰	1906
52	墨苑龍	白文	長方印	石	神獸	30×16×5.1	□□□篆	不詳	不詳
53	紅麝池館	朱文	方印	石		4.3×4.3×3.7	なし	不詳	不詳
54	施德□印	白文	方印	石	山水樓閣	30×30×6.5	なし	不詳	不詳
55	以介眉壽	朱文	長方印	木		7.5×3.7×4.3	なし	不詳	不詳
56	丙寅	白文	方印	石		1.9×2.4×3.6	なし	不詳	不詳
57	竟山翰墨	朱文	方印	牛角		3.8×3.8×3.3	なし	不詳	不詳
58	竟山心畫	朱文	方印	石	梅花	2.2×2.2×6.2	なし	不詳	不詳
59	金華山民	朱文	方印	石	神獸	2.8×2.8×9.0	戊子暮春之吉于東武亭步屨 曾桜花已謝牡丹將開 大迂陳人勸石	門山大迂	1888
60	山本由定	白文	方印	石		3.7×3.7×7.5	壬寅四月星州做泥封	徐星州	1902
61	①山本由定私印 ②山本繇定	白文	方印	木		5.8×5.8×4.3	なし	不詳	不詳
62	非亮品	朱文	長方印			4.5×1.8×5.0	なし	不詳	不詳
63	淡東	朱文	方印	石		5.8×5.6×4.8	なし	不詳	不詳
64	鳳鳴	朱文	方印	木		3.0×3.0×7.0	湖城刻	園田湖城	不詳
65	繇	朱文	丸印	水晶		直徑50×5.0	なし	不詳	不詳
66	鳳鳴山本繇定	白文	方印	石		3.6×3.7×3.6	衰為鳳鳴先生製	浜村藏六 (五世)	不詳
67	勇于不敢	朱文	方印	石		2.6×2.6×6.3	なし	不詳	不詳
68	家在龍山鳳水	朱文	方印	石		2.7×2.7×3.2	なし	不詳	不詳
69	時遷謫我書	白文	方印	石		5.6×2.5×3.0	なし	不詳	不詳
70	志在不朽	白文	方印	水晶	神獸	3.5×3.5×8.3	なし	不詳	不詳
71	壬子竟山	白文	方印	石		2.0×2.0×4.7	明治壬子正月 旁山貳刀 竟山先生教正		1912
72	山本繇印	白文	方印	石		2.8×2.8×6.8	竟山先生有京漢之行道出海上 喚鶴十年疊神猶昔 相見歡然為刻此印以留鴻爪云 辛酉春 吳門徐星周記	徐星州	1921

NO.	印文	印影	形状	印材	鉤形／薄意	寸法 (cm)	側款	刻者／作者	年代
73	古希老人	朱文	方印	石	山水樓閣	28×28×6.5	壬申五月 奉祝竟山先生古稀采寿 廖璽勇達彦	刻者／作者 足達壽郎	年代 不詳
74	竟山	朱文	丸印	石		40×40×3.0	なし	不詳	1932
75	鳳鳴岐山	朱文	方印	石		3.5×3.5×7.1	此印撫漢磚為竟山先生教正 壬寅四月星舟	徐星州	1902
76	竟山	朱文	方印	石	梅花	2.4×2.4×7.3	壬戌仲冬張璠芝刻	張璠芝	1922
77	鳳鳴	白文	方印	石		1.9×1.9×4.0	なし	不詳	不詳
78	山本締定印信	白文	方印	石		2.3×2.3×6.3	光緒癸卯夏四月 撫漢將軍印以贈竟山先生 徐星舟	徐星州	1903
79	山本卯兵衛	白文	方印	石		4.3×4.3×4.5	明治辛卯之秋七月鐫	不詳	1891
80	①己酉鳳鳴 ②安分自足	白文	方印	木		28×28×6.0	なし	不詳	1909
81	竟山	白文	方印	石	獸	28×28×9.0	數款：石譜／大迂仿古於東武孝步齋奏刀	不詳	不詳
82	山本締定	白文	方印	石		22×22×3.2	己巳七月藍田莊主	不詳	1929
83	金華山民	白文	方印	石		4.3×4.3×4.4	なし	不詳	不詳
84	竟山審定	白文	方印	石	山水	1.9×1.6×6.0	辛酉三月 為竟山老友作此 古泉徐星州	徐星州	1921
85	山本締定	白文	方印	石	梅花	2.4×2.4×7.3	竟山先生法家清玩	張璠芝	1922
86	百万石翁	朱文	丸印	石		2.9×2.9×5.8	なし	不詳	不詳
87	天道忌殺人貴知足	朱文	方印	石		2.6×2.6×3.3	なし	不詳	不詳
88	蕭初	朱文	方印	石		3.8×3.8×8.0	なし	不詳	不詳
89	鳳鳴岐山	朱文	方印	石	神獸	3.7×3.7×9.3	健列國勢叔攝作于二弩精舍	趙時桐	1923
90	山本締定長寿	白文	方印	石	神獸	3.7×3.7×9.3	趙叔攝仿漢竟山先生周甲榮壽 時癸亥秋七月	不詳	1923
91	踐定長寿	白文	方印	石		2.5×2.5×6.8	竹亭	奧村竹亭	1919年以前
92	鳳鳴	朱文	方印	石		2.5×2.5×6.8	竹亭	奧村竹亭	1919年以前
93	甲戌	朱文	丸印	不明		2.4×2.4×6.0	なし	不詳	不詳
94	曲則全枉則直	白文	方印	陶器		2.8×2.8×5.3	歲在甲寅 大正三年暮春 曲則全枉則直 竟山先生出此語 使□刻之 古越□井作	不詳	1914
95	餘清齋	朱文	橢圓印	石	神獸	3.3×1.8×5.3	歲在甲寅 大正三年暮春 曲則全枉則直 幾徑滄海結鸚鵡盟 齋號流傳記餘清 自分印人誰補傳 只今吾道欲東行 氷鉄	王大妍	1903
96	先生	朱文	方印	石	獸	1.8×1.8×6.0	なし	不詳	不詳
97	癸丑文字	朱文	方印	石	神獸	2.1×1.8×3.0	竟山先生正篆	不詳	不詳
98	山外山樵	朱文	方印	象牙		2.6×2.6×2.9	なし	不詳	不詳
99	半蟬	朱文	橢圓印	木		2.0×1.0×6.0	なし	不詳	不詳
100	竟山	朱文	方印	石		2.7×2.7×6.0 1.9×1.1×4.2	數款：湖城作 丁巳如月／先生日之 鳳雅士也喜金石精鑒別工書法名重中外 歲壬子 留寓申江余友道壹君以石屬刻 余不計工拙剪此以誌景仰耳 即請山本先生法家指正 寶山徐照鐫并鑒敬	不詳	1917
101	心畫	朱文	變形印	石	獸	2.0×1.0×5.3	なし	不詳	不詳
102	芋未	朱文	長方印	石		3.0×1.4×3.4	なし	不詳	不詳
103	清風來故人	白文	長方印	木		4.0×2.3×3.3	なし	不詳	不詳
104	応機接物	朱文	方印	石		2.2×2.2×4.1	庚辰十月竹堂生篆	不詳	1880
105	山本由定	白文	方印	石		2.9×2.9×5.4	竟山先生東京博雅士也 廣徵金石以論華才風調 不勝欽佩 係賜美濃佳紙罕見之宝 愛藏之 別無惡酬爰刻石印一方聊以奉贈 不免貽笑耳 光緒壬寅四月 古泉徐星州時 同客楓上而	徐星州	1902
106	餘清齋	朱文	變形印	石	花鳥	2.7×1.8×3.5	晴郎辛未午月	足達壽郎	1831
107	雪鳳	朱文	長方印	石	獸	2.4×1.5×6.0	なし	不詳	不詳
108	癸亥	朱文	長方印	石	鳥	2.1×1.0×5.4	なし	不詳	不詳

NO.	印文	印影	形状	印材	鈕形・薄意	寸法 (cm)	側款	刻者/作者	年代
109	龍嬰見	朱文	方印	石	神獸	20×20×5.2	なし	不詳	不詳
110	勇于不敢	朱文	長方印	石		20×15×3.7	なし	不詳	不詳
111	翰墨淋漓	白文	長方印	石		4.1×3.0×5.0	なし	不詳	不詳
112	客夢蘆花雨時情柳絮春	白文	方印	石		3.8×3.8×4.3	なし	不詳	不詳
113	見笑于大方	朱文	長方印	石	花卉	5.0×1.8×3.6	なし	不詳	不詳
114	綏定印信	朱文	方印	石		2.2×2.2×5.5	なし	不詳	不詳
115	竟山折金石印	朱文	長方印	石		4.2×1.5×4.7	なし	不詳	不詳
116	曲鑒	白文	方印	木		3.1×1.8×6.8	なし	國田湖城	不詳
117	知足常樂	朱文	長方印	木		20×1.8×6.0	なし	不詳	不詳
118	蘭亭	朱文	方印	鉄		5.3×5.0×1.5	(背) 大正癸丑 石榑作	不詳	1913
119	竟山鑒藏	朱文	方印	石	神獸	2.4×2.0×5.6	甲子秋山孝刻	不詳	1924
120	①子孫永保 ②長白山印	白文	方印	石		2.4×2.4×3.0	①仿子治刻□	不詳	不詳
121	①竟山畫記 ②竟山	朱文	方印	石		2.3×2.3×5.0	①戊子榴花月於東武孝步齋大汪生	門山大汪	1888
122	白雲紅樹	朱文	方印	木	神獸	3.3×2.8×4.3	なし	不詳	不詳
123	①山本由定 ②一狐之白	白文	方印	石		2.0×2.0×5.3	①惜花御史贈	不詳	不詳
124	①岐由延長琴 ②—□山下人	白文 朱文	方印	石		2.0×2.0×2.3	なし	不詳	不詳
125	十藏五出	朱文	長方印	陶器	神獸	2.4×1.6×4.2	為竟山先生—榮 正文曰十藏五出 高立仿古	片岡高立	不詳
126	竟山書印	朱文	方印	木		1.0×1.0×6.0	なし	不詳	不詳
127	丙寅	朱文	方印	石		1.2×1.4×2.8	なし	不詳	不詳
128	非売品	朱文	長方印	石		2.2×1.0×4.1	なし	不詳	不詳
129	師天地	朱文	長方印	石		2.8×1.2×4.8	なし	不詳	不詳
130	金石癖	白文	長方印	石	花鳥	1.7×0.7×5.1	なし	不詳	不詳
131	[]	朱白文相間	連珠方印	石		1.8×0.8×4.4	なし	不詳	不詳
132	会心不遠	朱文	長方印	石	鳳凰	2.1×1.3×3.5	なし	不詳	不詳
133	□□竟山	朱文	長方印	石	獸	2.4×1.8×4.3	大正七年一月寄山刻于□中菴 竟山先生削正	不詳	1918
134	缶鉞之章	朱文	方印	石	象	2.1×2.1×3.4	なし	不詳	不詳
135	竟山及勾	朱文	方印	石		1.8×1.8×5.1	吳城	阪井吳城	不詳
136	蘿堂	朱文	方印	石		2.2×2.2×3.0	なし	不詳	不詳
137	林□菴	白文	方印	石	花鳥	1.6×1.6×3.0	なし	不詳	不詳
138	岐陽山氏及勾朱印記	朱文	方印	石		2.3×2.3×1.8	なし	不詳	不詳
139	丙戌	朱文	方印	木		2.2×2.6×6.1	なし	不詳	不詳
140	甲子	朱文	長方印	石	如意	2.6×1.6×3.8	なし	不詳	不詳
141	山本綏定印信	白文	方印	木		3.0×3.0×3.1	なし	不詳	不詳
142	張子彪	朱白文相間	方印	石		1.8×1.8×4.5	竟山先生—榮 榑□作	不詳	不詳
143	竹頭木屑	朱文	長方印	石		2.8×1.3×4.5	芸田	不詳	不詳
144	壬戌	朱文	長方印	石		1.5×1.0×5.2	なし	不詳	不詳
145	摹写漢魏六朝文字	白文	長方印	石		2.2×1.3×3.0	翠藤作	木村翠藤	不詳

NO.	印文	印影	形状	印材	鉅形・薄意	寸法 (cm)		側款	刻者/作者	年代
146	竟山	白文	方印	石	神獸	28×28×4.7	なし		不詳	不詳
147	張子虎	白文	方印	石	虎	20×18×4.0	なし		不詳	不詳
148	壬戌	朱文	楕円印	石	蟬	28×08×4.0	なし		不詳	不詳
149	志在不朽	白文	長方印	石		25×15×4.8	なし		不詳	不詳
150	龍為下	白文	方印	石	神獸	15×15×4.5	なし		不詳	不詳
151	戊辰	白文	方印	石	神獸	16×16×5.0	なし		不詳	不詳
152	乙丑	朱文	方印	石	神獸	18×15×3.5	なし		不詳	不詳
153	雅興齋片	白文	方印	石		14×14×3.0	偽生仿漢		不詳	不詳
154	□□	朱文	長方印	石		16×14×5.2	なし		不詳	不詳
155	乙卯	朱文	長方印	石	獸	21×15×1.0	なし		不詳	不詳
156	草草不工	朱文	長方印	石		1.7×1.1×2.0	なし		不詳	不詳
157	平安守報	白文	方印	石		1.7×1.7×1.8	なし		不詳	不詳
158	① [] ② []	①朱文 ②白文	方印	石		1.3×1.3×2.9	なし		不詳	不詳
159	□□	朱文	長方印	石		1.8×0.6×3.2	なし		不詳	不詳
160	不爭	朱文	方印	石		2.4×2.5×6.2	なし		不詳	不詳
161	颯齋	朱文	方印	石		2.2×2.2×2.8	なし		不詳	不詳
162	① 峨嵋鑒藏金石 ② []	朱文	方印	石		2.4×2.2×2.3	なし		不詳	不詳
163	松月山房	白文	長方印	石	橋	3.4×1.6×1.1	なし		不詳	不詳
164	甲戌	朱文	長方印	石	桃葉	1.9×0.9×3.0	なし		不詳	不詳
165	天地無私奉又端	白文	方印	陶器	神獸	2.8×3.0×6.0	於學雲書屋 東□作并篆		不詳	不詳
166	[]	朱文	長方印	石		1.6×0.5×2.6	なし		不詳	不詳
167	A ①由定 鳳鳴 ②長樂無極 B ①山本縣定 ②鳳鳴 C ①縣 竟山 ②金石癖	A ①朱白文相間 ②白文 B ①白文 ②朱文 C ①朱白文相間 ②白文	A ①連珠方印 ②長方印 B 長方印 C ①連珠方印 ②長方印	木		A 2.7×1.8×2.6 B 1.6×1.6×2.6 C 1.1×0.7×1.7	C ①湯安	湯安	不詳	不詳
168	石華	白文	楕円印	石	仙人	1.8×0.7×4.0	数款：壬午冬日□龍自作／墨莊補刀		不詳	不詳
169	縣定	白文	楕円印	石	魚	2.8×1.0×3.5	癸丑二月作 石禪		不詳	1913
170	竟山臨本	朱文	長方印	石		2.8×0.6×1.8	なし		不詳	不詳
171	養泉經眼	白文	長方印	石	猿	1.8×1.8×4.8	数款：養泉先生法家具俊／又樹	吳昌碩	不詳	不詳
172	癸丑文字	朱文	楕円印	石	神獸	3.4×1.5×3.2	なし		不詳	不詳
173	山本由定	白文	方印	石	欠け	0.8×0.8×2.0	なし		不詳	不詳
174	[]	白文	方印	石		0.7×0.7×2.2	なし		不詳	不詳
175	君茂	朱文	楕円印	石		2.0×1.5×2.0	なし		不詳	不詳
176	肖形印	朱文	兔形	石		2.2×1.3×2.8	なし		不詳	不詳
177	□□	朱文	長方印	石	神獸	1.8×1.5×5.0	なし		不詳	不詳
178	百鍊	朱文	壺形印	石		1.5×1.3×3.8	なし		不詳	不詳
179	天天狗	朱文	丸印	陶器	天狗	3.7×3.5×3.2	なし		不詳	不詳
180	癸酉	朱文	方印	石	神獸	1.6×1.6×4.5	なし		不詳	1933

NO.	印文	印影	形狀	印材	鉤形/薄意	寸法 (cm)	側款	刻者/作者	年代
181	一笑而已	白文	菱形印	石	圭	19×12×4.7	なし	不詳	不詳
182	癸酉	朱文	長方印	石		20×10×3.8	なし	不詳	不詳
183	山叟	朱文	菱形印	石	山水	12×24×3.0	なし	不詳	不詳
184	寅戌	白文	長方印	石		20×13×2.8	なし	不詳	不詳
185	壬戌	朱文	方印	石	魚	15×17×4.4	なし	不詳	不詳
186	竟山無恙	朱文	九印	竹根		直徑20×2.3	なし	不詳	不詳
187	大吉羊	朱文	橢圓印	石		23×12×3.5	□二月十八日刊	不詳	不詳
188	涵翠	朱文	長方印	水晶		20×15×2.9	なし	不詳	不詳
189	竟山	朱文	方印	石		23×23×3.2	吳域作	阪井吳域	不詳
190	①壬子竟山 ②壬子竟山	白文	方印	石		20×20×4.5	なし	不詳	不詳
191	江流有聲斷岸千尺	白文	長方印	木		5.5×3.4×4.2	(背) 壬子夏寄山刻	不詳	1912
192	動能補拙	朱文	長方印	木		4.0×2.3×3.4	なし	不詳	不詳
193	七十老人	白文	方印	石		2.4×2.4×6.9	子誠作	不詳	不詳
194	由定私印	白文	方印	石		1.8×1.8×5.6	竟山先生雅正綴域作	不詳	不詳
195	①頑伯 ②鄧石如	白文	方印	石		3.0×3.0×3.5	①嘉慶二十年三月作 ②完白山人自製	不詳	1815
196	安雅	白文	方印	石	神獸	1.7×1.7×4.1	なし	不詳	不詳
197	昭和庚午	白文	方印	石	神獸	2.4×2.0×4.0	翠藤	木村翠藤	不詳
198	竟山之印	白文	方印	石	神獸	2.4×1.8×1.9	天	不詳	不詳
199	安平大	朱文	方印	石		1.8×1.8×4.0	なし	不詳	不詳
200	天道忌盈人貴知足	朱文	方印	石		2.4×2.0×2.2	なし	不詳	不詳
201	山本修定藏書	白文	方印	石	神獸	2.4×2.4×6.7	子誠作	不詳	不詳
202	鳳鳴鑑藏	朱文	方印	石	神獸	2.3×2.3×5.0	曉邨作	足達曉邨	不詳
203	竟山	朱文	方印	石	神獸	1.3×1.3×4.0	なし	不詳	不詳
204	鳳鳴	朱文	長方印	石		2.0×1.0×5.7	光緒癸卯三月 為竟山先生仿漢印請教我 徐星州記	徐星州	1903
205	契	朱文	方印	石	台盤	1.5×1.7×2.4	なし	不詳	不詳
206	我自用我法	白文	長方印	石		1.7×1.0×2.5	鳳越六十九翁篆刻	不詳	不詳
207	聖香	白文	方印	石		1.7×1.8×2.5	甲寅小至秋谷作	不詳	1914
208	玄之又玄	白文	方印	石	神獸	1.8×1.8×5.2	翠藤作	木村翠藤	不詳
209	鉞印	白文	長方印	石		1.5×1.0×3.3	石翁	不詳	不詳
210	鳳鳴	白文	方印	石	神獸	1.9×2.0×5.0	なし	不詳	不詳
211	稽式	朱文	長方印	石		2.0×1.8×3.1	なし	不詳	不詳
212	涉渺兮予懷	朱文	長方印	石		2.5×1.8×3.0	乙卯立春前三日作於五柳居 宜猷鈞徒	不詳	1915
213	鳳鳴	朱文	長方印	陶器	鼻	3.2×2.5×4.0	なし	不詳	不詳
214	由定鳳鳴	朱文	方印	石	仙人	2.2×1.2×4.0	新岡刻	徐星州	不詳
215	鶴壽	朱文	方印	石	神獸	2.0×2.7×4.2	なし	不詳	不詳
216	蟻定長壽	白文	方印	石		2.5×2.5×3.5	漢鑄印中最精者為竟山先生法家製 鍾芝記	金鍾芝	1923
217	蟻定長壽	朱文	方印	石	神獸	2.4×2.4×5.0	竟山先生法家正刻 庚午五月朔日个修王寶	王个修	1930
218	臨觀亭廿六幅之一	朱文	長方印	石	鸚鵡	3.2×2.0×5.0	癸丑四月湖域作	園田湖域	1913
219	集觀亭廿六對之一	白文	長方印	石	龍	3.6×2.3×6.2	竟山先生傳樂 湖域畔刊癸丑四月	園田湖域	1913

NO.	印文	印影	形狀	印材	鉅形／薄意	寸法 (cm)	側款	刻者／作者	年代
220	拈花	朱文	長方印	石		15×10×5.4	なし	不詳	不詳
221	餘清齋圖書印	朱文	長方印	木		39×25×2.5	なし	不詳	不詳
222	清和廬	朱文	方印	石		15×15×2.4	なし	不詳	不詳
223	心無爭	白文	長方印	石	神獸	17×10×4.5	なし	不詳	不詳
224	室董室	朱文	方印	石		38×38×2.0	なし	不詳	不詳
225	署中銜伺	朱文	方印	石	龍	17×17×4.5	なし	不詳	不詳
226	岫繇定印	白文	方印	石		25×25×3.5	なし	不詳	不詳
227	[] 山心書	朱文	方印	石		22×22×5.2	數款：藏六／白山居士	浜村藏六 (五世)	不詳
228	我愛其靜	朱文	方印	石		20×20×1.7	なし	不詳	不詳
229	讀□□筆	朱文	方印	石		15×15×3.8	なし	不詳	不詳
230	阿瑛	朱文	長方印	木		20×10×2.5	なし	不詳	不詳
231	臣由定	朱白文相間	方印	石		20×20×5.0	なし	不詳	不詳
232	鳳鳴所見金石	白文	方印	石		18×18×5.0	草率奏刀頗得吳讓之意味 古人云欲速則不達 余適以從速得之亦出於偶然也 今為老友鳳鳴先生之屬并請指謬 庚戌夏古吳徐星州記于瀝江	徐星州	1910
233	竟山藏書	朱文	長方印	石	獸	25×18×4.5	撫悲齋而□非不得心竟山方家正之 吳城	阪井吳城	不詳
234	鳴昂	朱文	方印	石		10×10×3.0	なし	不詳	不詳
235	由定戊申文字	朱文	方印	木		25×24×2.8	衰作	浜村藏六 (五世)	不詳
236	竟山己卯文字	朱文	方印	石		27×27×2.5	寄山刻	不詳	不詳
237	六十六歲後作	朱文	長方印	石		23×05×22	なし	不詳	不詳
238	丁卯	朱文	長方印	石	獸	15×23×4.0	なし	不詳	不詳
239	足吾所好觀而老焉	朱文	長方印	石	神獸	37×25×5.0	なし	不詳	不詳
240	竟山翰墨	朱文	方印	石		25×25×3.7	封泥渾石中含秀勁意味有不可思議之妙 非工刀深邃未易撫擬也 時癸亥冬至節錄芝記	金鈺芝	1923
241	張子虎	朱文	長方印	石	神獸	32×15×4.0	なし	不詳	不詳
242	竟山七十歲後作	白文	方印	石	猫	20×20×6.3	翠藤作	木村翠藤	不詳
243	字伯固	朱文	方印	石		18×18×3.4	伯固詞兄雅鑒	不詳	不詳
244	竟山	朱文	方印	石		25×25×5.2	結金石緣之一 竟山先生鑑正	浜村藏六 (五世)	1902以前
245	山本由定無恙	白文	方印	石		15×15×2.2	なし	不詳	不詳
246	岫由定印	白文	方印	石	獸	18×18×5.8	なし	不詳	不詳
247	竟山	白文	方印	石		18×18×5.5	光緒廿九年二月六日 山陰石潛吳鼐刻于竟山先生文房得漢□銅印□	吳鼐	1903
248	強其骨	白文	方印	石	獸	25×18×4.0	なし	不詳	不詳
249	己巳	朱文	長方印	石		19×12×3.0	なし	不詳	不詳
250	由定	朱文	方印	石		18×08×3.0	なし	不詳	不詳
251	護封	白文	方印	石	神獸	23×23×4.2	なし	不詳	不詳
252	貞堅私印	白文	方印	石		18×18×4.0	墨莊篆	不詳	不詳
253	碩果不食	白文	方印	鉄	瓦	20×20×2.0	大正元年十一月 中 為竟山先生作 石神作	不詳	1912
254	己巳	朱白文相間	方印	石		15×17×3.3	なし	不詳	1929
255	半樵翁	白文	方印	水晶	兔	20×20×2.0	なし	不詳	不詳
256	長樂未央	白文	方印	竹根		30×30×3.3	雪山	不詳	不詳

NO.	印文	印影	形状	印材	鈕形/薄意	寸法 (cm)	側款	刻者/作者	年代
257	由范私印	白文	方印	銅	環	1.5×1.5×1.0	なし	不詳	不詳
258	寸心千古	朱文	丸印	銅		直徑1.5×1.7	なし	不詳	不詳
259	王晉	白文	方印	古璽	瓦	1.2×1.1×1.2	なし	不詳	不詳
260	五珠	/	/	古文銭	/	直徑2.5	なし	不詳	不詳
261	[]	白文	方印	古璽	鼻	1.3×1.3×0.5	なし	不詳	不詳
262	[]	白文	方印	古璽	鼻	1.8×1.8×1.2	なし	不詳	不詳
263	/	/	変形	古璽	/	/	なし	不詳	不詳
264	[]	朱文	丸印	古璽	鼻	直徑3.6×0.5	なし	不詳	不詳
265	竟山臨本	朱文	方印	石		2.8×2.8×6.0	壬子冬十二月二十七夜漱齋剪此□僊再誌	不詳	1912
266	知足不驕	朱文	変形印	石	蝙蝠	3.6×3.1×3.8	昭和戊辰歲中祇月 仿古銅器銘為竟山先生大人高厲併乞教之 弟彦	足達壽郎	1928
267	抱負天	朱文	長方印	石		3.0×2.4×5.5	なし	不詳	不詳
268	岫由定	白文	方印	石		2.1×2.1×5.4	(背) 新周	徐星州	不詳
269	受天百禄	白文	変形印	石	竹	3.3×3.3×7.6	なし	不詳	不詳
270	鳳鳴	朱文	丸印	竹	環	直徑2.0×3.2	なし	不詳	不詳
271	繇	朱文	方印	木	瓦	1.5×1.5×1.1	なし	不詳	不詳
272	竟山	朱文	方印	木	瓦	1.5×1.5×1.1	なし	不詳	不詳
273	鳳鳴	朱文	長方印	木	神獸	1.8×0.8×4.5	なし	不詳	不詳
274	山本繇定 竟山	朱白文相間	連珠方印	石	神獸	2.6×1.3×5.3	なし	不詳	不詳
275	□樸	朱文	橢円印	石	神獸	2.2×1.0×3.0	なし	不詳	不詳

印石にある文字 (印文、側款) は、破損箇所を含め、解説できなかった字は□で、解説不能箇所の文字がさだかでない場合は「 」で示した。
 側款については、読みやすいように適宜字間を空け、改行箇所を変えた。一類の印石に複数の款がある場合は、/で側款を分けた。
 両面印、三面印など多面印の場合は、①、②、③などの数字番号で印面を分けた。側款がある場合は、関連の側款に同じ数字番号を付した。
 子母印など複数の印石が含まれる場合はA、B、Cなどの英字で印章を分けた。

本文で取り上げた竟山印章の印影（一部）



【3】



【5】



【15】



【20】



【23】



【31】



【33】



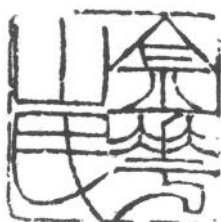
【49】



【50】



【51】



【59】



【60】



【75】



【67】



【72】



【73】



【76】



【85】



【89】



【90】



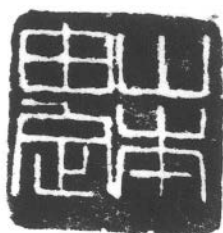
【91】



【92】



【94】



【105】



【121】



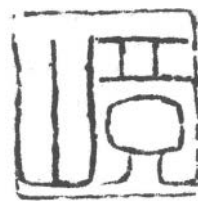
【216】



【217】



【241】



【244】



【218】



【219】



【232】



【240】